郷愁の丘 ロマントピア

山田百次

郷愁の丘ロマントピア

人物

鈴木茂治（すずきしげじ、９２歳）
元採炭夫。戦後、実家と畑が他人の手に渡っていたため、大夕張に移り住み炭鉱夫となった。

加藤謙三（かとうけんぞう、８４歳）
元採炭夫。誰よりも稼ぐ炭鉱夫だった。

中村三郎（なかむらさぶろう、８５歳）
元炭鉱夫。左腕がない。２２歳の時に炭鉱事故で左腕をなくした。２５歳で写真館を開業。大夕張で一つしかない写真屋さんだった。

島谷紀男（しまたにのりお、８６歳）
元採炭夫。退職して、大夕張浄水場の管理人になった。高台の浄水場から大夕張を見つめてきた人物。

島谷珠恵（しまたにたまえ、紀男の孫３２歳）・セツ（紀男の亡き妻）
祖父の紀男と三郎を車で連れてくる。

沢田忠（さわだただし、４１歳）
ツーリングカップル。東京から札幌に転勤してくる。

沢田菊子（さわだきくこ、３５歳）
ツーリングカップル。沢田の妻。

このあと、寝たきりの人の写真も撮る予定。

晩秋の午後。

★や☆は同時に発声する。

設定

夕張市、大夕張メモリアル眺望駐車場。ここは夕張岳を一望でき、下にはシューパロ湖が広がっている広場である。黒い直方体が一つ、中央もしくは下手よりに置かれている。

舞台奥の壁一面に白い幕が垂れている。その下にはホリゾントがある。最初は真っ青だが、時間の経過とともに青から赤へと変わっていく。

その手前には上手から下手へずらっと柵がある。

上手は夕張市側。駐車スペースと簡易トイレがある方向。その他5つか6つのモニュメントがおかれている。下手は芦別や岩見沢に行く方向。

夕張市タウン誌の記者、須藤の依頼で、ダムに沈んだ大夕張の街の住民だった茂治、謙三、紀男、三郎は大夕張メモリアル眺望駐車場に集まることになっている（八十以上で現地に残ってる人で、動ける人はこの四人になった）。

場内整理をしている茂治役の俳優。上演時間になったら挨拶をする。

俳優　本日は青年団リンク　ホエイの公演にご来場、まことにありがとうございます。『郷愁の丘ロマントピア』上演時間は約１００分を予定しております。

皆さん夕張市はご存じですか？　北海道の真ん中ほどに位置します。メロン有名ですね夕張メロン。はい、財政破綻しましたね。元々この街は石炭で栄えた街でした。夕張市は大きく分けて二つの炭鉱会社が仕切っていました。一つは北海道炭鉱汽船、略して北炭。幸せの黄色いハンカチとか、石炭の歴史村博物館。もうなくなった遊園地。あと今、若い市長が頑張ってる市役所があったり、主に夕張市をイメージするのがこっちだと思います。そこから東へ２０キロ離れたところにもう一つ、三菱鉱業株式会社大夕張炭鉱。三菱の炭鉱で栄えた街がありました。そこは夕張川本流にあったので、おお、ゆうばり。「大夕張」と呼ばれました。景気が良いときは、二万人近い人が住み、映画館やダンスホール。たくさんの飲み屋があったりと、大賑わいでした

話しながら帽子を被る。

茂治　え～申し遅れました。わたくし（俳優の名前）が演じる今回の役名は鈴木茂治と申します。彼、東北の生まれなんですが戦争で中国に５年行っておりました。やっとの思いで日本に戻ってきたら、戦争行く前に耕していた畑は売られ、家もなくなってました。そこで彼は北海道へわたり、この大夕張で炭鉱夫となりました。日々、仕事があることに感謝して、ひたすら石炭を掘りました。日本は高度経済成長の時期です。３０を過ぎ４０過ぎても、ひたすら石炭を掘りました。５０を過ぎた時、この大夕張で一生を終えようと家を建てました。そのとたんに炭鉱は閉山。そして６０過ぎ７０近くになったら今度は、大夕張の街がダムの底に沈むということで、彼は追い出されることになりました。悔しかったけど、出て行きたくなかったけど、黙って指示にしたがいました。携帯電話、時計のアラーム

など音の出るものは黙って指示に従い電源からお切りください。そして80も終わりに近づいた時、長年住んだ大夕張の街はとうとう

茂治　（俳優の名前）演じる加藤謙三が来ました、謙ちゃんです。一緒に石炭掘った仲間です。え～と謙ちゃん歳なんぼ？

謙三　84

茂治　はい、ありがとう。謙ちゃん夕張出たあと、札幌の娘夫婦のところにいたんですが、やっぱりこっちが良いって、最近帰ってきました

謙三　ふ～。夕張岳は今日も立派だな

茂治　ん？　わたくしの家族ですか？　嫁が死んで25年さなります。子ども三人いだんですが、全員先に亡ぐなりました。家族は残りませんでした。残ったのは共に石炭ば掘った仲間だけ

謙三、奥の方を眺めながら

謙三　やっぱりいいね～こっち来て正解だったよ

茂治　紅葉は終わったけどな

茂治、後ろを指さす。すると、ホリゾントが青く光りはじめる。

茂治　後ろに見えるシューパロ湖というダム湖の底に沈みました。今わたくしが立ってるここは、大夕張メモリアル駐車場と言います。大夕張の街が沈んだシューパロ湖を一望できます。ここには、沈んだ学校の校碑やそのほか街の記念碑が集められ、こんな感じで置かれています……ん？　今ですか？　彼は御年92となりました。もうこれからなにがあってもいいように、こうして準備だけはしております

茂治、「遺書」と書かれた封筒を見せる。

加藤謙三が上手から出てくる。

謙三　いや～驚いたよ

茂治　なにが？

謙三　鹿が、増えた～

茂治　人が減ったからな～どんどん増えて大変よ。事故が多いんだよ

謙三　そうかい

茂治　ほんと、よそ者と鹿だけは増えた

謙三　じゃあれもか？

茂治　え？

謙三　ほら白銀橋の上の、あのバイクのカップル

茂治　……あ、そうそうああいうのあああいうの。財政破綻したからって見に来てんだ

謙三　掃除終わった？

茂治　え？　ああうん。あとこれを拭いて終わり

謙三　これも？

茂治　だってタウン誌に載るんだべ？　ピカピカに磨いておかないとさ

謙三　ああ、そうかい

茂治　インタビューなんてダムに沈んだ時以来だなこんなの～ちゃんと話せるかな～

謙三もバケツからぞうきんを取り出し、直方体のモニュメントを拭き始める。

茂治　いいよ謙ちゃん休んでて

謙三　いや、茂治さんにだけやらせるわけにはいかねえよ

茂治　ああ、悪いね～

謙三、右手首をさすっている。

茂治　手首、まだしびれるの？

謙三　ん？　そうだね～しびれがなかなか取れないねえ。朝起きて寒いとピリピリしびれるんだ

茂治　今日はしばれたな～朝から救急車出てるし

謙三　あんだけしばれると、ポックリ逝っちまうよな

茂治　オレも今日こっち（左手）の小指が痛くてさ

謙三　あらら、大丈夫かい？

茂治　うん、今はもうなんともねえ

謙三　あ、そうかい

茂治　謙ちゃん、病院には行ってるの？

謙三　ううん。月一回、家に来てくれる

茂治　それだけ？

謙三　あんまり治りようないって言うんだもの。薬もビタミン剤か芳香剤しかねえからって

茂治　★謙ちゃん、あのさ

謙三　★茂治さんは薬飲んでらの？

茂治　ん？　ああ血圧のと肝臓のと心臓の薬飲んでるよ

謙三　あら、心臓の薬増えたんでないかい？

茂治　そうなのさ。増えたのさ、スゲえだろ～

謙三　いやいやいや、オレだって肝臓の薬飲んでるよ

茂治　へへ……石炭掘ってる頃はよ酒、飲んだもんな～

謙三　飲～んだ飲んだ飲んだ飲んだ。一番方だと3時に仕事終わって、そっからやることねえもの、稼いだ分、全部飲んでしまったね

茂治　（客席に向かって）オレたち炭鉱夫って仕事は、一番方が朝7時から午後3時まで、二番方は3時から夜の11時まで。三番方は11時から朝の7時まで。要は二十四時間ヤマずっと動いてる。時々メタンガスが突然吹き出るから危険なんだこれが

謙三　いやでも茂治さんは元気だよ。一人で暮らしてらんだべ？

茂治　そうだよ。清水沢の団地だよ、誰もいなくなったから、あの団地に今一人で住んでんだ

謙三　あそこ、ボロボロじゃないかい？　大丈夫かい？

茂治　ひどいよ。雨漏りひどいし、壁がはがれてきてっから、市役所に電話して直せ～っても、やってくれないからよ。怒鳴ってやったよ

謙三　強いな～茂治さんは

茂治　謙ちゃん三番目の息子といるんでしょ？

謙三　そうそう三番目と一緒にいるよ

茂治　三番目は結婚は？

謙三　いや～無理だろうな～

茂治　なんで？

謙三　５５だし、もう嫁来ないだろ

茂治　あ、そうかい。★謙ちゃんあのさ

謙三　★あいつ、いま仕事がないからオレの年金で暮らしてんだ

茂治　え？

謙三　オレが食わしてやってんだ（笑）

茂治　……ああ、その年でがんばるな～（笑）

謙三、右手首をさする。

茂治　謙ちゃん

謙三　ん？

茂治　それパチンコのしすぎっしょ？　こうこう

謙三　いやいや、パチンコのしすぎは茂治さんでしょ

茂治　え？

謙三　好きだったもんな～昔から。なんだっけあの千年（ちとせ）のパチンコ屋、駅からちょっといったバーＧＯＬＤとかサトミの家具屋過ぎて

茂治　ああ、ニュー三洋パチンコな～行ったな～

謙三　今だったらあの宮前のあそこに通ってるの？

茂治　ハビン、パーラーハビン。今のは面白いよ。ＣＲ必殺仕事人ブイ

謙三　ブイ？　なんだブイって

茂治　ブイって言ったら決まってるだろ？

謙三　なに？

茂治　ビクトリーのブイよ

謙三　なんて？

茂治　ビクトリー

謙三　あ、そう

茂治　「八丁堀同心、中村と申しますが」って主水さん出てくるだろ？　そしたらお前、激アツリーチよ

謙三　主水さんてアレだろ、あの～あの人あの人

茂治　藤田まことだよ

謙三　パチンコに行ったら藤田まことに会えるのかい？

茂治　そうだよ♪　てれれ～（テーマをくちずさむ）

謙三、上手の方をみて。

謙三　あら、来たんでないかい？　紀男さんたち

茂治　おおやっと来たか。遅いな

謙三　おお～い（手をふる）

茂治　……謙ちゃん

謙三　ん？

茂治　金貸してくれ

謙三　……金？

茂治　うん。次の年金入ったら返すから

謙三　今？

茂治　うん

謙三　……オレ自分の年金で、息子食わしてんだよ？

茂治　今日の帰りでいいからさ。な？

謙三　……

茂治　な？

上手から中村三郎が入ってくる。首から一眼レフのカメラをぶら下げている。

三郎　おお

謙三　サブちゃん

三郎　遅れてすまん

謙三　なんもなんも

三郎　茂治さんも久しぶり

茂治　（舌打ちのあと）やっと来たのは（俳優の名前）演じる中村三郎８５歳。若いときに炭鉱事故で左腕をなくした。

謙三　サブちゃんサブちゃん。あの車イスって

三郎　ん？　ああ紀男さんだよ

謙三　え？

三郎　うん

謙三　そうなの？

珠恵　こんにちは～

上手から島谷珠恵、島谷紀男の車イスを押しながらやってくる。

謙三　あら、紀男さんかい？

紀男　おお……謙ちゃん。久しぶり

謙三　どうしたの、それ

紀男　んん？

三郎　謙ちゃん知らないの？

謙三　何が？

三郎　紀男さんこの間、玄関でつまずいて腰の骨折ったんだよ

謙三　いつ？

三郎　半年くらい前じゃないかい？

珠恵　そうそう

謙三　ええ！　茂治さん知ってた？

茂治　うん、オレは知ってたよ

謙三　言ってよ～オレ、知らなかったよ

三郎　珠恵ちゃん大変だったよな～

珠恵　うん

三郎　なあ

珠恵　私も救急車に一緒に乗ったんだけど、病院着くまで時間かかって

紀男　★すいませんね～

謙三　★ええ、なんで？

三郎　ほら、破綻してから夕張の病院が救急やめたべ？

謙三　あ、そっかそっか。ええ、じゃあつまずけないね～

紀男　（笑）

茂治　（俳優の名前）演じる島谷紀男86歳。と、その孫の珠恵ちゃん

謙三　珠恵ちゃん、久しぶりだね～！

珠恵　どうも～

謙三　せっちゃんにそっくりだね

三郎　そうなんだよ、オレもちょっと見ないうちにますます似てきたから、驚いたよ

紀男　（笑）

謙三　なに、珠恵ちゃんの車に乗っけてきてもらったの？

三郎　そうだよ須藤が乗っけてくれるって言ってたのにさ、ちょっと遅れるから先行ってくれって言われてさ

謙三　そうかいそうかい

茂治　なに遅れるの？

三郎　そう

茂治　なんでよ？

三郎　さあ

茂治　いつ来るんだ？

三郎　いや、分かんないよ

茂治　分かんないってなんだ分かんないって。こっちはアレだぞ、お前らと違って早く来てキレイにして待ってたんだぞ

三郎　だから分かんないって

間。

謙三　まあ、ちょっと遅れるだけだろ。あれか？　サブちゃんが写真撮るの？

三郎　いや、須藤ちゃんが撮るよ

謙三　じゃあそのカメラなに？

三郎　ん？　あ、これ？

謙三　うん

三郎　孫が送ってよこしたのさ

謙三　おお、良いな～

珠恵　あら～

紀男　ん～

三郎　まあ中古だけどな。せっかくだから撮ろうかと思って

謙三　それ、使えるの？

三郎　バカにするな、今でも毎日撮ってるんだ

茂治　サブちゃんは25歳で写真館を開業。本当は今日、夕張のタウン紙を作ってる須藤ってヤツが、ここで写真を撮ってオレたちにインタビューするはずだったのに遅くなるらしい。どういうことだ

茂治、言いながら下手へ去る。珠恵は茂治が去って行くのをジッと見ている。

謙三　いや～でも良かった良かった。なんでもいいから生きててくれれば

それで良いんだ

紀男　（うなずく）

珠恵　おじいちゃん、良かったね謙三さんや三郎さんに会えて

紀男　（うなずく）

謙三　あれ、茂治さん？

三郎　便所だべ

謙三　ああ

謙三、三郎、珠恵、紀男、上手から下手へ、バイクが通り過ぎるのを見ている。

三郎　あれ、止まった

謙三　あいつら、さっき白銀橋（しろがねばし）にいたよ

三郎　あ、そうなの。なんかこっちに来るよ

謙三　いや～さっき、茂治さんからお金貸してくれって言われてビックリしたよ

三郎　え？

謙三　いきなり言ってくるんだもん

三郎　なんぼ？

謙三　それは言われてない。とにかく貸してくれって

三郎　茂治さん、いろんな人に聞いて歩いてるみたいだな

謙三　そうなの？

三郎　うん、オレももうあんまり会わないようにしてるんだ

謙三　何に使うの？

三郎　パチンコだべ

謙三　ああ、さっきも話してらったよ

三郎　え？

謙三　パチンコのこと、楽しそうに

三郎　あ、そう

謙三　なんだっけ、必殺仕事人、ブイてのがあるんだってよ

三郎　ああ？　ブイ？

謙三　ブイはなんだっけ？

紀男　ビクトリー

三郎　あ？

紀男　必殺仕事人ビクトリー

三郎　ビクトリー？

謙三　そうだそうだ、そう言ってた

紀男　（うなずく）

珠恵　おじいちゃん違うよ、ファイブだよ

紀男　（驚く）

珠恵　必殺仕事人ファイブ

紀男　……でも、茂治のアニキがそうやって

珠恵　ファイブだよ

紀男　（ショックを受ける）

謙三　息子、東京にいるんだべ？

三郎　息子、いねえべ

紀男　亡くなったよ

沢田夫妻が下手から来る。おそろいの革つなぎ。沢田はフルフェイスのヘルメットを小脇に抱えている。菊子はまだ被ったまま。

沢田　こんにちは〜

菊子、ヘルメットを颯爽と脱ぎ。

菊子　こんにちは

謙三、三郎、紀男は一切クチをきかない。茂治下手から顔を出し。

珠恵　こんにちは～

沢田　良い景色ですね～

珠恵　そうですね

間。沢田、舞台奥のほうを向き。

沢田　ほら、夕張岳だよ

菊子　ここから見るとキレイだね

沢田　ねえ、キレイだね～向こうとは違うね

菊子　おじいちゃんのところだと近すぎたんだね

沢田　うん

菊子　なんかいっぱいツンツンしてるけど、ぜんぶ夕張岳？

沢田　ええと……あれじゃない？　あの一番とんがってるの

謙三、三郎、紀男はムッとして夫妻をにらむ。

菊子　あ～あれか

沢田　そうそう

紀男、これみよがしに咳払いをする。謙三と三郎、声をひそめて話してるつもりだが丸聞こえ。

謙三　なに言ってんだ、アレが夕張岳なわけねえだろ

三郎　なあ、何も知らねえくせに

紀男、もう一度これみよがしに咳払い。

菊子　あっちの左のもかな？

沢田　どうだろう？

謙三　分かってないな～なんにも分かってない

三郎　なあ

紀男　（大きなためいき）

珠恵　ど、どれが夕張岳ですか～？

沢田　あ、アレですよね？　あのとんがってるの

珠恵　あ～あれは前岳っていうんですよ

沢田　あれ？

菊子　あ、そうなんですか。（沢田に）ウソ言わないでよ

沢田　ご～めんごめん

珠恵　あの前岳から右にチョンチョンチョンって三つとんがってますよね？

沢田　右にですか？　はいはい

珠恵　その次に台形っぽいのありますよね？

沢田　はい、ありますね

珠恵　あれが夕張岳なんですよ

沢田　あ、そうなんですか？

珠恵　はい

沢田　へ～控えめだ～

菊子　あの、じゃあ前岳の左側の山は？

珠恵　あれは姫岳っていうんですよ

沢田　え、姫？

珠恵　はい

菊子　かわいい～

沢田　へ～

菊子　ね、登れるんでしょ？　今度行こうよ

沢田　うん

謙三　今度っていつよ

三郎　これから熊出るよ熊

紀男　（笑）

沢田　あの、さっき、この湖の（上手方向を指し）そっちのほうで、なんか船みたいなのやってたんですけど、アレは？

珠恵　ああ、カヌーじゃないかな。あ、今日やってんだな

沢田　カヌー

珠恵　はい、たまにやってるんです。体験もできますよ

沢田　へ～そうなんですか～（菊子に）ちょっといってみようよ

菊子　え、危なくない？

沢田　見るだけ

菊子　あ、うん

珠恵　どちらから来たんですか？

沢田　札幌からです

珠恵　ああ

沢田　この辺の方ですか？

珠恵　はい。もう少し街のほうですけど

沢田　そうですか

珠恵　はい

沢田　いや、ボクのおじいちゃんが、あの橋の向こうで農家をやってたもので。それで妻を連れて見に来たんですよ

紀男、謙三、三郎。驚いて二人を見る。

珠恵　え、そうなんですか？

沢田　はい。なにか名残があるかなって思ったけど、やっぱりなにもないもんですね

珠恵　そうですね。このダムを造るとき全部更地にしたんで

沢田　いや、ビックリしました。あんな山の中を拓いて農業やるなんて、相当大変ですよね。しかも人力でしょ？

珠恵　私もちょっとその辺は分かんないですけど

紀男　★名前は？

沢田　★そうですよね、まあ来れただけでも良かったです

菊子　ちょっと、あの人

沢田　ん？

紀男　あんたの名前は？

沢田　ボクですか？

紀男　（うなずく）

沢田　沢田です

紀男　……さわだ

謙三　沢田って……もしかしてヒトシさんかい？

三郎　ええ？

沢田　おじいちゃんヒトシです

謙三　アンタ……ヒトシさんの孫かい

沢田　はい

間。

謙三　そうかいそうかい。アンタヒトシさんの孫かい

沢田　はい

紀男　あんた、下の名前は？

沢田　忠です

紀男　ヒトシの★孫で忠か

謙三　★ヒトシの孫で忠かい、そうかいそうかい

紀男　（謙三をにらむ）

三郎　おじいちゃん元気かい？

沢田　あ、あの～亡くなりました

間。

謙三　そうかいそうかい亡くなったかい

三郎　いつ亡くなったの？

沢田　いや、もう10年以上前です

謙三　あ、そんな前かい

紀男　ヒトシさん、どこで★亡くなったんだ

謙三　★ヒトシさん、どこで亡くなったの？

紀男　（謙三をにらむ）

三郎、みんなの写真を撮り始める。謙三（時に紀男も）カメラを向けられたら、なにかポーズを取る（ピースじゃないヤツ）。

沢田　東京です

謙三　ああ東京ね

珠恵　あれ、でもいま札幌に住んでるって

沢田　はい。ボクが仕事の都合で転勤してきたんです

謙三　そうかいそうかい

珠恵　じゃあ、もとは東京なんですか？

沢田　はい。先月からこっちに来ました

珠恵　そうですか

謙三　そうかいそうかい

沢田　おじいちゃん死ぬ前、ずっとこっちの生活のこと、話してくれてたんで見たくなったんです

紀男　★ヒトシの息子は元気にしてるのか？

謙三　★そうかいそうかい、夕張帰ってきたかったんでないかい？

間。

沢田　ああ、まあ

謙三　でしょ～

紀男　★ヒトシの息子は元気にしてるのか？

謙三　★そうだよ、沢田さんがんばってたもの～

菊子　ちょっとあの人

沢田　え？

菊子　なんかしゃべってた

沢田　あ、ほんと？

謙三　ん？　紀男さんどうかした？

紀男　……どうもしないよ

謙三　紀男さん、なに、怒ってるの？

紀男　怒ってないよ

謙三　怒ってるよ

紀男　怒ってないよ

謙三　怒ってるよ

紀男　怒ってないよ！

珠恵　おじいちゃん

紀男　……（咳払い）ヒトシの……息子は元気にしてるのか？

沢田　息子、ああ、ボクの父ですか？

紀男　（うなずく）

沢田　あ、はい。去年定年したけど、また働いてます。

謙三　へ～何の会社？

沢田　信用金庫です、葛飾の

三郎　はい、みんなこっち見て～

謙三　なんだよ、いきなり

三郎　とるよ～

菊子　（沢田に）ちょっと邪魔になるって

沢田　ああ

三郎　いや、みんな入って

沢田　でも

菊子　いや、いいですいいです

紀男　ああ、アレアレ、あの～（悩む）

謙三　いいから入って入って、ほら早く

菊子　ええ？

沢田　ほら、入ろうよ

三郎　撮るよ～

沢田、大きくダブルピース。珠恵、いまふうのピース。菊子、最初はためらうが控えめにピースしようとしたらシャッター音。

菊子　あ

三郎　は～い

謙三　もう撮ったの？　なんか言ってよサブちゃ～ん

三郎　はい、ありがとう

紀男　ああ、（下手を指しながら）忠の息子が卒業した学校のあの～アレがあるぞアレ

沢田　はい？

珠恵　おじいちゃん何？　石碑？

紀男　あ、そうだそうだ

沢田　あの、忠はボクです。おじいちゃんはヒトシです

珠恵　おじいちゃん

紀男　あれ？　そうか

三郎　息子の名前はなんていうの？

沢田　サトシです

三郎　ああ、サトシサトシ

謙三　そういえばヒトシさん、男の子何人も連れてたな～

紀男　息子の忠は兄弟いただろ

沢田　ボクですか？　一人っ子です

謙三　お父さんの兄弟は？

沢田　父は7人兄弟で、上からタカシ、マサシ、ヒロシ、タケシ、ツヨシ、ゴンゾウ、で、サトシです

珠恵　（笑）みんな三文字

謙三　もう分かんないよ

紀男　（下手を指しながら）忠の息子が卒業した学校のあの～アレがあるぞアレ

沢田　はい？

紀男　あの～アレだ、アレ、あそこに（ため息）

珠恵　おじいちゃん何？　石碑？

紀男　あ、そうそう

謙三　さっきもその話したんでないかい？

紀男　おい、あっちのほうだついてこい。珠恵、あっちにお願いします。

珠恵　うん。でもおじいちゃん。アタシ一回ウチに戻らないと

紀男　ちょっとアッチに行くだけ、押してくれる？

珠恵　あ、うん

謙三　はいはいはい、じゃあ皆さんであっち行きましょうあっち

三郎　エツシはなんの仕事してるの？

沢田　ボクは忠です。某大手飲食チェーンで働いてます

珠恵、車イスを押して上手のほうへ行く。みんなもそれについていく。

少し無人の時間。

茂治が下手から戻ってくる。左肩をさすっている。

茂治　なんだこれ肩こりか

珠恵、上手から来る。

茂治　珠恵ちゃん、みんなあっちに行ってなにしてらの？

珠恵　なんか、初めて来た人たちにこの辺のこと教えてる

茂治　ああ、あのバイクのヤツらか

珠恵　その人のおじいちゃんが橋向こうで開拓農家だったんだって

茂治　ええ？　だれ？　誰の孫なの

珠恵　沢田だって

茂治　……ああ沢田。イモだのカボチャだのよくもらったもんだ。まわりがメロンやってっから自分もやりだしてな～

珠恵　あ、そうなの

茂治　そのとたん、ダムが決まったからな～投資したぶん回収できねかったんだ

珠恵　これ

珠恵、茶封筒を茂治に差し出す。

茂治　……

珠恵　おじいちゃんが渡せって

茂治　……あ、そう。（受け取る）うん、次の年金入ったら返すから

珠恵　パチンコに使うんでしょ？

茂治　……

珠恵　ねえ

茂治　あ？　なんか言った？

珠恵　なんで、人からお金借りてまでパチンコするの？

茂治　（耳が遠いしぐさ）なんだって？

珠恵　……

茂治　なに言ってるかわかんねえよ

珠恵　そんな歳になってまで、みっともないって思わないの？

茂治　……

珠恵　アコムとかあんだろ。ウチのおじいちゃん死ぬとこだったんだよ、そんな人からお金借りて恥ずかしいと思わないの？

茂治　珠恵ちゃん、珠恵ちゃん。オレも大変なんだよ

珠恵　は？

茂治　パチンコなんか行ってねえよ

珠恵　いつもいるでしょ？　必殺仕事人ファイブの前に座ってるでしょ？

茂治　は？

珠恵　見てこいって言われるんだよ、おじいちゃんから。茂治のアニキ、茂治のアニキって。今日はアニキ勝ったのか負けたのかって、アタシに見てこいっていうんだよ

茂治　珠恵ちゃん、珠恵ちゃん

珠恵　は？

茂治　必殺仕事人ファイブでねえよ。ビクトリーだよ（Vサイン）

珠恵　うるせえよ。おめえ勝ったの見たことねえよ、弱えくせにやるなよ

茂治　珠恵ちゃん珠恵ちゃん

珠恵　あ？

茂治　アコムは夕張にないから

珠恵　死ねよ

珠恵、上手へ去る。

茂治　レイクは北炭のほうにあるけど、遠いんだよ

茂治、少し、珠恵が去った方向を見ているが、突然、何かに当り始める。それから左肩をさすり

謙三　そうだよ。大夕張の街が沈む時にな、せめてこういうものだけは残そうって、めぼしい石碑たちを、急いでここに移したんだ。だから大夕張の記憶がここに残ってる

茂治　いたたたた、限度額いっぱいだし、いたたたた

茂治、ちょっと地べたに座り込み、痛みをこらえ気を落ち着けようとしているのか、舞台奥の、夕張岳の方向を眺める。

菊子　へ〜（茂治に）あ、こんにちは

謙三　茂治さん、どうした？　つかれたかい？

茂治　ああ、ちょっとな〜

茂治　オレは頑張ったよ。怠けたことなんて一度もなかったんだよ。なあ？

謙三　須藤は来たかい？

茂治　……なんでだ？　頑張ったのにこれか？　なんであんな、あんなひよっこに、説教されなきゃいけないんだ？　あいつは腹へらしながら人殺したことあんのか、あ？　山の中アリの巣みたいに掘って、いつガスが出て吹っ飛ばされるか、天井が崩れて生き埋めになるか、死ぬ思いしたことあんのか、あ？

茂治　来てないよ

謙三　この人たち橋向こうの沢田さんとこの孫だって

茂治　ああ、さっき珠恵ちゃんから聞いたよ。紀男

紀男　ん？

茂治　受け取ったから

紀男　（うなずく）

上手から皆が戻ってくる。沢田が紀男の車イスを押している。

謙三　この人、鈴木茂治さんっていって、俺たちのアニキ

沢田　そうなんですか、こんにちは沢田です

菊子　だから、こうやってここに集めてるんですね

菊子　妻の菊子です

茂治　どっから来たの？

菊子　はい？

沢田　札幌です

茂治　沢田もそこにいるの？

沢田　いえ、あの

謙三　もう１０年も前に東京で亡くなったってよ

茂治　ええ？

沢田　はい、僕らは仕事の都合で札幌に転勤してきて住んでます

菊子　（茂治に）大丈夫ですか？

沢田　ん、なにが？

菊子　え、だってなんか

茂治　なんだ沢田の野郎、東京なんか行くから死んだんだ。こっちに住んでれば良かったんだ

沢田　はい？

茂治　アイツ心臓弱かったよな昔から

沢田　……まあ、そうですね

茂治　環境変わると心臓に良くねえんだってへらへら笑ってたからな

沢田　……

菊子　なに、この人

茂治　おめえら水飲んでる？

沢田　はい？　水ですか？

茂治　札幌住んで、蛇口から出る水飲んでる？

沢田　ああ、はい。こっちの水は美味しいですね、やっぱり。

茂治　あんたらが飲んでるの、このダムからひいてる水だから

沢田　あ、そうなんですか

茂治　オレが苦労して買った家と土地を、ダムの底に沈めたの。札幌に今住んでるヤツらは、そのおかげでおいしい水飲めっから。（紀男、謙三、三郎を指し）こいつらも追い出されてるんだから

沢田　あ……はい

茂治　（三郎を指し）コイツ、こう見えて写真屋だったんだよ。腕は良いんだよ、腕はないけど腕は良いっつって（笑）

紀男　（笑）

茂治　だから大夕張の良い写真いっぱい持ってるから、一枚もらって蛇口にでも貼ったらいいよ。そしたら忘れないよな、オレらのこと

三郎　いやいやいや、茂治さんそんな、別にこの人たち関係ねえべ

謙三　そうだよ。今日はただ、おじいちゃんが住んでた場所をただ見たくて来たんだから

茂治　あんたら夫婦だって？

沢田　はい

茂治　子供は？

沢田　子供はいないです

茂治　なにやってんだ？

沢田　はい？

茂治　バイクでこんなところに来てるヒマがあったら子供作れ

沢田　え？

茂治　ほら、早いほうがいいぞ

沢田　……いや、ちょっと……それは（笑）ええ？

菊子　え、なに？　なんなの

茂治　どいつもこいつも、遊んでないでさっさと子供を作れ。じゃないとあとで大変だぞ。どうすんだ、死ぬまで働けるのか？

沢田　そんなこと言われても、ねえ（笑）

菊子　なんで笑ってんの？

沢田　え？

菊子　なんでそんなこと言われなきゃいけないんですか？

茂治　あ？

菊子　……

茂治　な、なんだアンタ

菊子　あなたこそなんですか？　歳取ってたら何言ってもいいんですか？

茂治　なに～？

菊子　女をそういうふうにしか見てないんですか？

茂治　おまえは、なんだ。だ、黙って言うこと聞いてればいいんだ

菊子　え？

茂治　老人をもっといたわれ。お前らの未来の姿だぞ、自分の未来の姿なんだから大切にしろ

菊子　あの～アレですよね……産みたいって思えないんですよね全然

茂治　あ？

菊子　こんなさ、よくわかんないジジイにいきなり怒られるような国だと、これから生まれる人ほんとかわいそう

茂治　（耳が遠いしぐさ）なんだって？

菊子　……

茂治　よく聞こえねえよ

菊子　お前らがこんな国にしたから産みたくねえんだろ

茂治　なに～

菊子、さっと上手へ去る。

沢田　あ、ちょっと

茂治　こら、戻ってこい。

謙三　いやいやいや、やめなって

三郎　茂治さん、なんてこと言うの

謙三　そうだよ、あんな事言わなくてもいいっしょ

謙三、茂治に寄っていく。茂治、左肩を触っている。その呼吸は乱れている。

三郎　言って良いことと悪いことあるだろ

謙三　すまんな、普段はあんなこと言う人じゃないんだよ。今日疲れてんだよ

沢田　あ、別に、いいです

謙三　勘弁してくれ、な？

沢田　いえいえいえ

三郎　まあ、茂治さんもよかれと思って言ってるから

謙三　そうそう

沢田　……はい？

謙三　な

沢田　それはどういうことですか？

謙三　それはそうだろう。いや、まあオレもな、大変だったけど男三人、女一人、借金もしないで全員育て上げたよ

沢田　……

謙三　何もないけど、それだけが自慢だ、なあ？

三郎　ああ。オレも腕一本で家族やしなってきたんだ。普通は子供作って一人前だからな、普通は

謙三　なんだったら夕張引っ越してこい、良いところだぞここは。協力するから、なあ？

三郎　ああ、オレは子育て得意だぞ

沢田　……あ、じゃあ

沢田、上手へ去ろうとするが。

謙三　オレは南部の加藤謙三ってんだ、連絡しろよ

三郎　オレは宮前に住んでる中村ってんだ

沢田、去り際に。

沢田　あの

謙三　ん？

沢田　いや……ボクたちだって作りたいです

謙三　え？

三郎　なに？　あ、子どもか？

沢田　はい

三郎　じゃあ作ったらどうだ？

沢田　いえ、あの、昔とは違いますから

謙三　何が？　子ども作るのに、昔も今も関係ないだろ

三郎　そうだよ

沢田　いえ、違うと思います

謙三　なんで

三郎　あの～アレだ、都会だから大変なんだろ？

謙三　ああ、そうか、そうだな。こっちは自然がいっぱいだぞ

三郎　オレたちもいるから安心して育てろよ、なあ？

謙三　そうだな

三郎　いつくたばるか分からんけどな（笑）

謙三　（笑）

沢田　ウチのおじいちゃん、こっちでの生活はつらかったつらかったって
ずっと言ってました

謙三　……え？

沢田　来たばっかりの時は、笹で屋根ふいた掘っ立て小屋にすんで、土に
鍬いれたら鹿の角がたくさん出たり。夜、外で熊が、くるみをガリ
ガリ割ってたり。

謙三　……お、おう。沢田さんとこ、熊獲ったって写真撮ってたもんな

三郎　あ、おれ撮ったわその写真

謙三　……そうかい。沢田さんがそう言ってたかい

沢田　はい……じゃあ、あの、どうも

沢田が下手へ去り際。

謙三　おいヤスシ！

沢田　……え？

謙三　……ヤスシ？

沢田　忠です

謙三　忠

沢田　ヤスシなんて人はいません。なんですか？

謙三　オレは、死ぬならここが良かったから、ここに帰りたくてしょうが
なかったから、この歳で戻ってきた

三郎　タケシ、とりあえず作ったらいいんだ。子どもはな、いいもんだぞ

沢田　……

三郎　タケシ

沢田　忠です

紀男　ツ〜ヨ〜シ

沢田　忠です……全部まちがってます。わざとでしょ？

三人、見合ってから沢田に向かって首を横に振る。沢田、軽く一礼して下手へ去る。

間。

謙三　言いたい放題、言いいやがって

三郎　アレだな、最近の若いヤツらは目上に対する、あの〜アレがなってないな

謙三　そうだアレ、あの〜アレがひどい

三郎　ひどい

謙三　ひどい

紀男　おい、アレ

謙三　え？

紀男は沢田夫妻が行った方向を見ている。謙三、三郎も見る。

三郎　あ〜奥さん泣いてんの？

謙三　そうみたいだね

紀男　（にこやか）

三郎　あ〜

謙三　あら、やさしい旦那さんだね〜

間。

紀男　（驚く）

三郎　あれ？

謙三　ちょっと外でかい？　外であんなことすんのかい？

三郎　あららら

紀男　（口をすぼめ、チューの形）

謙三　ちょっと、あれ見てよ茂治さん

茂治、動かない。

謙三　茂治さん……疲れたかい？

謙三、茂治を揺り動かすが反応がない

謙三　茂治さん、寝てんのかい？　茂治さん？

三郎　どうした？

謙三　寝ちゃったよ、この人

三郎　ええ？　茂治さん、茂治さん。かぜひくよ

三郎、口に手をかざす。

三郎　あ

謙三　なに

三郎　息してないんじゃないか？

謙三　え！？

謙三も確かめる。

謙三　ホントだ、茂治さん茂治さん！

三郎、茂治を揺する。

紀男　何やってんだ！　動かしちゃだめだ！

謙三　え！　あ、そうかい

三郎　……え～と、どうしよう

紀男　アレしないとあの～今すぐ、あの～

三郎　あ、電話しよう

謙三　そうだ

紀男　あ、それそれ

紀男が電話を探してもたもたしている間に三郎が電話をかける。謙三は持っていない。

謙三　心臓の薬増えたって自慢してたな～

紀男　具合悪いとか言ってなかったか

謙三　え？

紀男　苦しいとか

謙三　……あ～朝、どっちだかの小指が痛いって言ってた

紀男　小指が痛い？

謙三　うん

紀男　女にでも噛まれたか

謙三　いやいやいや、紀男さん。そんなわけ……茂治さん？

三郎　もしもし！　茂治さんが倒れ……え！？　え～とそれは

謙三　なに？　どうした？

三郎　救急か消防かどっちだって

謙三　……

紀男　……

謙三　救急でないかい？

三郎　ああ、救急です。え、なに？　あ、住所？　住所は～（二人に向かって）住所わかるかい？

謙三　住所なんてあんのかい

紀男　この辺は、明石だろ、大夕張鹿島明石町だな

三郎　え、なに？

紀男　大夕張鹿島明石町

三郎　大夕張鹿島明石町……あ、そうそう。あの～南部から長いトンネル越えてシューパロ湖の広い駐車場あるだろ……はい。茂治のアニキが倒れたんです……いやアニキじゃないけど……アニキです……え？　いや、一山一家って言ってな。え？　う～んと、ちょっと怒ってて気がついたら息してないの。え？　血？　血は……（茂治に近寄る）

謙三　（出てない出てない）

紀男　（出てない出てない）

三郎　出て、ない。血は出てない……え？　あ、そうなんですか？　早くしてくださいお願いします……はい、はい、動かさないようにします

三郎、電話を切る。

三郎　今、救急車、出払ってて時間かかるらしい

謙三　そうなのか

三郎　うん

謙三　……息してないって大丈夫かな。救急車くるまで、なにかしなくていいのか

三郎　え～と、人工呼吸か！

謙三　そうか！　サブちゃんやったことあるか？

三郎　ないよ

謙三　紀男さんは

紀男　ないよ

三郎　謙ちゃんは？

謙三　……オレもないな

間。

紀男　待つしかないな

間。

謙三　鹿島明石で通じるんかい。こんな、道路と湖しかないのに

紀男　大夕張の住所は全部そのまま残ってるらしいぞ

謙三　あ、そうかい、え、番地もかい？

紀男　郵便屋が言ってた

謙三　へ～じゃあ、手紙だしたら届くんかい、湖の中まで届けてくれるんかい

三郎　水の底にポストがあったら入れてくれるんじゃないか

謙三　あの頃のオレらに届くんでないかい？

三郎　……謙ちゃん

謙三　ん？

三郎　ローマンチストだな、その顔で～（笑）

謙三　その顔は余計だろ（笑）

紀男　昔からそうだった、昔から

三郎　顔は、昔からだよなあ？

謙三　うるせえよ

紀男　危なくセツ、取られるところだった

謙三　あれ、そうだっけ？

三郎　そうだ、謙ちゃんよく告白してダメだったよな～

謙三　そうだっけ？

三郎　そうだよ。ほら一回さ、登山に誘ったことあったよな

謙三　ああ！　あの時な！

三郎　懐かしいな

謙三　そうだそうだそうだ～（徐々に客席を向きながら）紀男さんの嫁さんのせっちゃんはな～ずっとオレらの、まあ原節子みたいなもんだった。みんな奥手で、何にも言えなかったけど、オレだけは二十歳の頃からずっと口説いてた。

三郎　（謙三に）おい！　呼んできたぞ！

若き日の三郎（両腕がある）、上手にいって手招きをする。すると、セツと、その友だち（沢田菊子役、二役）が出てくる。

三郎　こっちだよ

友だち　ほらこっちだって

セツ　……

友だち　あ、ほらなんかいるよ

謙三　なんでアイツも来るんだよ

三郎　だって、なんかついてくるんだよ

友だち　あの、用ってなんですか？

若き日の謙三、もじもじしつつモニュメントの後ろから、新聞紙に包まれた花束をとりだしながら。

謙三　せっちゃん

セツ　はい

謙三　これ、あげる

セツ　……何？

謙三、花束を手渡す。

セツ　え？

謙三　この花知ってる？　ユーパリコザクラ。夕張岳にしか生えてねえんだよ

セツ　……

謙三　ほ、他にもさ、ユーバリソウとかウサギギクとかいっぱい咲いててキレイなんだよ、他にもいっぱいいっぱいあるからさ、今度一緒に登らない？

セツ　……

謙三　で、テッペン登ってさ、一緒に……ジンギスカン食おうよ

セツ　え？

謙三　大丈夫だから一式オレが背負っていくから。仲間内でよくやってんだぜ、へへ

友だちがセツに耳打ちしている。セツはそれをうんうんと聞いている。じれったい思いをしながら客席を向き。

謙三　（客席を向き）夕張岳は湿原や岩場、いろんな環境がある。そのせいか、そこでしか生えてない植物がたくさんあってキレイなんだ。オレは夕張岳が大好きでよく登った。大夕張には、それぞれの事情をかかえた人たちが色んなところから流れてきた。ここ大夕張の自然と夕張岳の山々は、流れ者の俺たちを分け隔てなく受け入れてくれたんだ

セツ　……あの

謙三　はい

友だち　そんなところ行ったら危険ですよね？

謙三　は？

友だち　だってほら、熊とか出ますよね？　頂上行くまでに様々な危険が待ち受けてますよね？……待ち受けてますよね？　私は待ち受けてると思う

謙三　ああ、うん。まあこれ取ってる時も親子連れ遠くに見つけちゃって、すげえ怖かった

友だち　ええ！？　もし熊とばったり遭った時、あなたはせっちゃんを守れるんですか？　守れないでしょ？　私は守れないと思う

謙三　おめえ誰だよ

友だち　はい？　私は、せっちゃんと一緒にここに来た友だちですけど

謙三　おれはせっちゃんに話してんだよ

友だち　私、せっちゃんのお母さんから、せっちゃんよろしくねって言われてるんで、せっちゃんのお母さんみたいなものです

謙三　はあ？

友だち　どうもお母さんです

謙三　なんだと～

友だち　なんですか？

セツ　あの

謙三　はい

セツ　夕張岳にしか生えてないお花ですよね？

謙三　そうだよ。気に入った？　もっと取ってくるよ

セツ　そんな貴重なお花を、平気で取ってくる人、私好きじゃないです

謙三　え？

セツ　一緒に登山したくないです、ごめんなさい

謙三　……ええ～

セツ、謙三に花束を返して上手へ去る。友だちも去ろうとするが

友だち　私は、テッペンでジンギスカン食べてもいいですよ

謙三　は？

友だち　山登り好きだし。私と行ったらぜったい楽しいと思うんですよ、どうですか？

謙三　うるせえよ、あっち行けよ

友だち　……おまえ、ぜったい後悔するから、ぜっったい後悔するから！

友だち、去る。

謙三　……ちくしょう〜

三郎　ああ、ダメだったな〜まあ気にすんな。今日は飲もう飲もう

謙三　茂治さ〜ん！

謙三、茂治の肩をたたくが、反応がない

謙三　茂治さん寝てんのかい？　茂治さ〜ん！

謙三、もう一度、肩をたたく。

茂治　はい！　不撓不屈の精神で突撃します！……あれ？　謙ちゃ〜ん

三郎　茂治さん、もう飲んでんの？

茂治　どうしたの〜

謙三　どうしたのじゃないよ〜

茂治　ええ？　（三郎に）なにコイツ？

三郎　女に告白したんだけど、ダメだったんだ

茂治　ああ？　ダメだったの（笑）

謙三　笑い事じゃないよ、くそ〜

紀男　誰に告白したんだ？

紀男、車イスから立ち上がり、そばに座る。

謙三　おお、いたんかい

三郎　あれだよ、あの最近、生協で働いてるセツっていう娘だよ

紀男　アイツはダメだ、やめとけ
三郎　え？
謙三　なんでだよ
紀男　ろくなもんじゃねえよ
謙三　理由は？
三郎　そうだよ可愛いだろ、理由は？
謙三　（三郎に）え？
紀男　……ダ、ダメなもんはダメだ
三郎　それじゃわかんねえよ
謙三　そうだよ、それじゃわかんねえよ理由きかせてくれよ
三郎　あんな良い娘、他にいねえだろ？
謙三　★（三郎に）え……サブちゃんもかい？　サブちゃんもなのかい？
紀男　★ダメだって言ってんだろ、しつこいな
三郎　なんでだよ、紀男さん何か知ってんのか？
謙三　サブちゃん、そういうのは言ってくれよ
紀男　アイツはな、せっちゃんはオレがもらうって決めてんだ
謙三　☆……え？
三郎　☆……え？
紀男　アイツはオレがもらうんだ
謙三　それって向こうは知ってんのかい？
紀男　知らねえよ、しゃべったこともねえから
謙三　しゃべったことないのかい？
紀男　そうだよ
三郎　そんなの勝手に決めんなよ！
紀男　うるせえ
茂治　欧米から亜細亜を解放するのです！

茂治が酔っ払って絡んでくる。

三郎　うわ！
紀男　ちょっとアニキ、飲み過ぎだよ～
謙三　若え時はこんな感じで楽しく暮らしてたよ。でもな仕事で入る山の

中はいつも緊張の連続でよ。穴の中で昼メシ食ってると、よく山鳴りドーンてするんだよ。すると上からパラパラーって来るだろ？　白米汚さないように、ふろしき被って、食べる分だけ弁当の蓋ずらしながら腹ごしらえすんだよ。握り飯持ってったらダメ、目の見えないネズミにやられる。穴の中は暗いから目が退化してんだ。そのかわりアイツら鼻がきくんだよ。握り飯をスコって鞄のなかに入れといても必ず食われる。だからアイツら焼いて食ったらうめえんじゃねえかってくらい丸々と太ってんだよ

謙三、ゆらりと立ち上がり、客席へ移動しながら。

謙三　山跳ねっていうのがあってな。穴の中で働いてると、地面が50センチくらいかな？　一瞬でボンって跳ね上がるんだ。別の炭鉱で昔、でっけえトンネルの地面と天井が山跳ねでペタってくっついて、中にいた人間がみんなセンベイみたいになったんだと。あんた50センチ跳ね上げられたら人間どうなると思う？　何が起こったか本当わかんねんだ

ゆっくりと溶暗。

謙三　その日は山跳ねが起きたんだ。そういえば何日か前からネズミがいねえなって話はしてたよ。そしたらメタンガスが吹き出して、オレの体が何メートルも吹き飛ばされた。気がついたら衝撃で体が動かない。真っ暗で自分の手も見えない、前後も分からない。ただドーンドーンと響く音と、人が叫ぶ声が聞こえてさ。混乱するオレの頭の上から土砂がパラパラ降ってくる。このまま山の中に埋まるのかって思ってたら、灯りをもってオレの名前を叫ぶ人がいるんだよ。それ、茂治さんでさ。オレ、もう泣きながら「茂治さーん」って叫んで。そしたら「アニキー！　茂治のアニキー！」って紀男さんの声も聞こえんだよ。その日はガス爆発で殉職5人。負傷者39人。俺たちアニキに助けられなかったら消火のために穴ふさがれて、密閉されるところだった。サブちゃんも茂治さんに助けられたけど、

吹っ飛んできたでっけえ岩に左腕を潰されて、何ヶ月も入院してやっと出てきた。俺たちは喜んだけど

溶明。三郎、腕を片腕に戻して、地べたに座りふさぎこんでいる。茂治はひきつづき酔っ払っている。

紀男　おいサブちゃん、なにふさぎこんでんだ

謙三　命あっただけよかったんだよ。いや、まあ腕がなくなったのは大変だろうけど

紀男　そうだぞ。アニキがひっぱってくれなかったら腕どころじゃなかっただろ

三郎　そんなの分かってるよ

紀男　じゃあ、もっとアニキに感謝しろよ

茂治　紀男

紀男　……

茂治　感謝しろってなんだよ。オレたちゃ家族だろ。家族は助け合うもんだろ、感謝とかしなくていいんだよ

紀男　（返事）

三郎　アニキ

茂治　ああ？

三郎　オレこれからどうやって生きていけばいいんだよ。炭鉱で働けなかったら、もうこの街にいられねえよ、ここから出て行きたくねえよ

紀男　オメェ、助けてもらってなんだよその口のきき方は

三郎　だってよ

紀男　だってもへちまもねえだろ！

茂治　紀男

紀男　……

茂治　良かったじゃねえか

三郎　……え？

茂治　もう山に入らなくていいんだぞ

三郎　……

茂治　オレやコイツらは、また山に入らなきゃいけねえ。コイツ（謙三）

なんか穴の前で、ぶるぶる震えてさ、足が前に行かねえんだと

三郎　……

紀男　アニキ、それだけじゃねえよ。コイツ今朝、爪切ってたら爆発のこといきなり思い出して油汗止まらなかったってよ（笑）

謙三　紀男さん、言わなくて★いいんだそんなの

紀男　★バカ、そんなのオレだってあるよ。だからっていつまでも怖がってたらな、ここじゃ生きていけねえよ（笑）

謙三　分かってるよ☆そんなの

紀男　☆分かってねえよオメェは。オレらはどうせ、どこにも行けねえ。五体満足なうちはまた穴の中で石炭掘るしか能がねえ。だから色々諦めて穴入って石炭掘れよ（笑）

謙三　うるさいな〜

間。

三郎　なんで、また入るんだよ

謙三　ん？

三郎　あんなことあったのにまた入るなんておかしいだろ？

謙三　……ん〜まあ、あっという間だからな

三郎　え？

謙三　穴の中にいるとあっという間に時間が経つだろ？　陸（オカ）にいると時間が長えからよ

紀男　まあ、そうだな。上がってきて堀田の牛乳飲むのが最高なんだよな

謙三　ああ、今日も生きて帰ってきたって感じするよな

三郎　……オレだって、みんなと一緒に入りてえよ

間。

茂治　サブちゃん、よく写真撮ってたよな

三郎　ええ？　ああ、うん

茂治　今度、オレんとこのガキが三人、七歳五歳三歳ってちょうど七五三なんだよ。だから、写真撮ってくれねえか？

三郎　え？

茂治　北炭のほうから写真屋呼ぶの嫌だからよ。ちゃんと礼はするから

三郎　ああいいけど

茂治　おお、頼むわ

紀男　ああ、春日町の奈良ってヤツがよ、今度嫁さんもらうんだと、北炭のほうから写真屋呼ぶのがいやだって言ってたよ

茂治　あ、そうなの

紀男　うん

茂治　じゃあサブちゃん、その写真撮ってお金もらったらいいよ。オレが口聞いてやるよ

三郎　え？

紀男　サブちゃん、そのまま写真屋やったらいいんじゃねえか？　この町に一軒もねえだろう？

三郎　写真屋

謙三　ああ、いいね。やりなよ、もうかるんじゃねえか？

三郎　うん。

謙三　そしたら大夕張にいられるな

三郎　そっかそうだな

謙三　サブちゃんよかったな

三郎　うん。紀男さん、ありがとう

紀男　オレじゃねえだろアニキだろ

三郎　あ、そっか。茂治さん、ありがとう

茂治、返事をしない。

三郎　茂治さん？

謙三　あれ、（また寝たの？）茂治さん茂治さん、

三郎　茂治さん、茂治さん……茂治さん、茂治さん

紀男　（ここまでに車イスに戻る）そんなに呼んだってダメだろう

三郎　……茂治さん茂治さん

紀男　そっとしといたほうがいいんじゃねえか？

三郎　……でもさ、三途の川渡りそうになっても、呼ばれて戻ってきたと

かあるだろ？

紀男　まあ、そういう話はきくけど

三郎　それで戻ってきたんだよオレ

紀男　……

三郎　腕潰されたとき、三途の川渡っててさ、そしたら茂治さんの声が聞こえたんだ。それでなんだよ～って戻ってきたら目が覚めて、それで思いっきり叫んだんだよ「ここだー！」って「茂治さんここだー！」って

紀男　……

謙三　サブちゃん、茂治さんにいっぱい助けられてんなあ

三郎　……茂治さん、茂治さん……茂治さん、茂治さん

謙三　茂治さん、茂治さん

三郎、謙三。何度か呼んでいる。

三郎　紀男さんも黙ってないで呼んでよ

紀男　……

三郎　なんで黙ってんだよ

紀男　うるせえ

三郎　……うるさくねえだろ

紀男　うるせえって。ただ呼んでたってダメなんだよ

三郎　じゃあ他にどうしたらいいんだよ

紀男　だから、うるせえって。今思い出してんだからよ

三郎　え？

紀男　アレ、なんだっけアレ

三郎　なに？

紀男　アレ、あの～（ため息）

三郎　いいからほら、呼んでよ

紀男　ああ！　もう出てこねえよ～……なんで出てこねえんだよ～

三郎　……なに、なにが？

謙三　どうしたの？

三郎　紀男さん、あんまり興奮すると脳みそが

謙三　そうだよまた血管つまるよ

紀男　いいんだよ、そんなのどうでも！　それよりアレ、アニキが好きだったアレ

謙三　え？

紀男　ああ、（舞台奥を指さす）あれなんだっけ

謙三　なに、夕張岳？

紀男　違う違う下の、水、水

謙三　水ってシューパロ湖？

紀男　そうそう、それが最初にさ……ああ、わかった

三郎　ええ、なにが？

紀男、「大夕張の歌」を唄う。茂治がにや～っと笑って、紀男を見て手拍子をする。謙三と三郎もそれを見て喜ぶ。セツと友だちがキャッキャしながら見ている。一番を歌い終わったら盛り上がる。

茂治　うめえな～紀男。これ、今度ののど自慢大会、優勝するんじゃねえか？

紀男　（笑）アニキ、この歌好きだもんな～

茂治　バカ、オメェ、三橋美智也が大夕張のこと唄ってんだぞ！　こんなすげえことねえだろ！

紀男　ああ、そうだな

謙三　おい、あれ

三郎　え、あ

謙三　紀男さん、ほらまた来てるよ～

紀男、二人の方を見る。するとセツが恥ずかしそうに手をふる。紀男もはずかしそうにそれに応え、二人でどこかへ消える。

謙三　お熱いね～なんなんだよ。オレが最初に声かけたんだぞ、なあ

三郎　……

謙三　サブちゃん？

三郎、二人組の方向を見ているが、意を決して手を振る。

謙三　サブちゃんダメダメ～もうセッちゃんは紀男さんにホの字なんだからよ～

友だちがそれに気づき、三郎に向かって手を振る。三郎、恥ずかしそうにそれに応え、もう一度手を振る。

謙三　サブちゃん！？　いつの間に？

三郎、ニヤニヤしながら謙三を見ている。その時、沢田ヒトシが下手から駆けてきて友だちとぶつかる。ヒトシと友だちが見つめ合う。

謙三　サブちゃん、あれ

三郎　え？

ヒトシ、友だちに手を差し出し。

ヒトシ　オレと一緒に、新しい命を育ててくれないか？　畑で友だち、感極まり、手を取ろうとするが。

三郎　おい！

ビクッとした友だち、ヒトシと三郎を交互に見る。やがてヒトシの手を取り、走り去る。

三郎　……ああ、なんでだよ

謙三　……サブちゃん

三郎　なんでだよ～

謙三、三郎の肩を抱く。三郎、謙三の肩越しに客席に向いて。

三郎　オ、オレは……そんなこんなで……写真屋を開業した。その後は本当に忙しかった。二万人越える街で、写真屋はウチ一軒。冠婚葬祭。他にも盆に正月、七五三。そのたびに呼ばれて写真を撮るので、忙しい時は飯食うヒマもなかった

三郎、話ながら紀男とセツの結婚写真、沢田夫妻の結婚写真などを撮っていく。

三郎　結婚写真なんか一度も失敗したことはなかったよ。もし失敗して、次の日「もう一回写させてくれ」てことになったら嫁さんの衣装からなにから大変なことになるだろ？　責任が重大なんだよ写真屋っていうのは、その人たちの大事な人生を写すんだから。そうやって大夕張中の人たちを撮り続けたんだよ。なにより盛り上がったのは6月の山神祭り。大人も子どもも御輿をかついで練り歩いた。それ以外にも

茂治　ビール早飲み競争、よーいスタート！

茂治、紀男、謙三、エキストラ（沢田役など）、ビールを一気飲みする。勝った人はガッツポーズ。

茂治　バナナ早食い競争、よーいスタート！

セツ、友だち、エキストラ（カツラ着用）バナナの早食い。勝った人はガッツポーズ。

三郎　他にも大晦日の裸詣り、町内対抗運動会や駅伝。行事があるたびにカメラと道具を自転車につんで大夕張中を駆け回ったよ。忙しくて、忙しくて目が回りそうだった、目が回るほど楽しかった。でも、この楽しい街から去って行く人が増えてきた。１９６０年から炭鉱の合理化が始まったんだよ

茂治と、謙三、紀男は話をしている。少し離れたところに三郎がいる。

茂治　謙ちゃん、お前の所に会社からなんか話なかったか？

謙三　いいや。きてないよ

茂治　……そうか

謙三　なんで？

茂治　弥生町の佐藤もやめんだってよ

謙三　え！

茂治　希望退職の話のんだって

謙三　またかよ。これでもう何人だ？

茂治　３００は越えたんじゃねえかな

謙三　ちくしょう

茂治　機械どんどん入れてるから、その分、人は用なしなんだよ

紀男　この前の賃金闘争でけが人６０名だって？

茂治　向こう警察呼んでよ。この前の定期大会が途中で停電になったのも、あれぜったい三菱がなんかやったんだ

謙三　茂治さん

茂治　ああ？

謙三　北炭のヤツらがよ～ケチビシ、ケチビシってバカにしてくるんだよな

茂治　あんなヤツら相手にすんな

紀男　組合は闘うんだろ？

茂治　うん。労働条件、生活条件はぜったい下げさせない、希望のもてる大夕張にしようって盛り上がって終わったよ

三郎　国がエネルギー転換政策ってやつ決めたんだろ？

謙三　なんだよ、それ？

茂治　もう石炭じゃなく石油にするんだってよ

謙三　ほんとかい、それ

茂治　北海道中の小さい炭鉱は潰れてきてる。もう国も三菱も石炭は用なしだとよ。戦争でオレから家も畑も奪っておいて、★今度はここでの生活まで取って行く気だ。オレが何したっていうんだよ

三郎　★今度はここでの生活まで取って行く気だ。オレがなにしたってい
うんだよ……って、茂治さんは悔しそうに話してたよ。次の年から
政策転換闘争が本格的に始まった。大夕張から東京へオルグが出発
した。北海道から九州の炭鉱労働者三万人が大蔵省や通商産業省に
陳情にいったり銀座をデモ行進したそうだ。その後、大夕張でも閉
山阻止の集会。この時代はまだみんな闘ってたんだ。自分たちが勝
ち取るべき権利を信じて、やるべき事を選択して闘ってたんだ。で
も１９７３年８月２１日、三菱大夕張炭鉱は閉山。この時オレは働
いてた従業員全員写したんだ。失業保険の写真。再就職の写真。い
つ死ぬか分からない仕事をしてきた人間を、一人ひとりオレの手で
写真におさめた。

三郎の前に茂治、謙三、紀男の順番に立っていく。それぞれ意気消沈
した顔だが、カメラに写る瞬間、気丈に振る舞う。

茂治　サブちゃん、よろしく。

三郎　おお

茂治　男前に撮ってくれよ

三郎　おお（笑）

茂治　しかしな、この年になって再就職するなんてな～５２だぞ

三郎　同じ三菱で良かったじゃない

茂治　南部の南大夕張炭鉱は最新の設備があるらしいぞ

三郎　新しい炭鉱は違うね

茂治　まあな

三郎　茂治さん、ここから通うの？

茂治　ああ。南部はすぐそこだ。オレはここに家も買ったしな。あと少し
で定年だからそれまで頑張るわ

三郎　再就職出来なかった人たちどうするのかな？

茂治　さあ、札幌とか、内地に行くヤツもいるんじゃねえか？

三郎　そうだね

茂治　サブちゃんどうすんの？

三郎　え？

茂治　ここにいるのか？

三郎　なんで？

茂治　炭鉱がなくなったら人が一気にいなくなるぞ。商売に困るんじゃねえか？

三郎　オレはここが好きだから

茂治　そうか

三郎　うん

茂治　……こんど、ウチ銀婚式だからよ。また写真とってくれな

三郎　おお。（シャッターをきる）はい、ありがとう

茂治　あ

謙三、茂治の隣に立つ。

謙三　男前にとってくれよ

三郎　……（笑）

謙三　なんで笑ってんだよ

三郎　いや、それみんな言ってるから

謙三　え？　なに、男前に撮ってくれって？

三郎　うん

謙三　おれは特別、男前に撮ってくれよ

三郎　大丈夫だよ謙ちゃん男前だから

謙三　……やっぱり？

三郎　こんなに炭鉱が似合う男いないから（笑）

謙三　笑ってるよ（笑）

三郎　（笑）

謙三　……サブちゃん、知ってる？

三郎　なに？

謙三　大夕張神社がもう更地になってたよ

三郎　え、もう？

謙三　驚いたよ

三郎　そうか～最後もう一回写真に撮りたかったな

謙三　……神社なんて、そんな簡単に建てたりこわしたり出来るもんなん

だな

三郎　そりゃ三菱が建てた神社だからな。三菱引き揚げたら神社も壊すだろ

謙三　でも、俺たちはまだ住んでるよ

三郎　うん？

謙三　神社ってそこに住んでる人のためにあるんじゃないのか？

三郎　……

謙三　なあ

三郎　まあ、会社のための神社もあるんだろ

謙三　……

三郎　戦争のためにさ、いろんな国に建てたのもあるだろ。そういうのは、そこに住んでる人間、関係ないだろ

謙三　そうなのか？

三郎　そうだろ

謙三　……山神祭りも裸詣りも、あの神社に奉納してたんだぜ。もうそれもできないよ

三郎　そうだな

謙三　いままであったことが、いきなりなくなるのは寂しいな

三郎　うん

謙三　……

三郎　じゃあ、いくよ

謙三　おお。サブちゃん男前に★撮ってくれよ

三郎　★は～い

謙三　え？　もう撮ったのかい？

三郎　はい、ありがとう

謙三　サ、サブちゃん。ちゃんと☆撮るって言ってくれよ

三郎　☆この時がオレの写真人生で一番忙しかった。この街を、人を撮り続けてきたオレにとって、こんな凄い日はなかったんだ

紀男、三郎の前に立つ。

三郎　顔をもっとこうしてくれ

紀男　（動かす）

三郎　もうちょっとこう

紀男　（動かす）

三郎　そうそうそう

紀男　……サブちゃん、あのよ

三郎　男前に撮るから

紀男　……お、おう

三郎　紀男さんで最後だし。気合い入れて撮るわ

紀男　大変だったろ、従業員全員って

三郎　まあ、でも楽しかったよ

紀男　何人ぐらい撮ったんだ？

三郎　あとでちゃんと数えるけど、１５００は越えたかな

紀男　そんなにか

三郎　ああ

紀男　稼いだな

三郎　（笑）

紀男　そのうちの５００人か

三郎　え？

紀男　南大夕張に再就職できたのは

三郎　……紀男さん、南部に引っ越すんだろ？

紀男　ん？　ああ嫁がな、向こうで働くのに、こっから通うのを嫌がるんだよ

三郎　そうか

紀男　今度引っ越す住宅は2階建てだから、そこに住みたいんだと。まあオレも三番方の時でもぐっすり眠れるからな

三郎　……北炭のほうは大変なんだろ？

紀男　退職金とか補償金はほとんど出てないみたいだな

三郎　ひどいな

紀男　ほら、北炭のほうでよくこんなの流行ってたろ？　「夕張、食うばり、坂ばかり、ドカンとくれば死ぬばかり」

三郎　紀男さん

紀男　ん？

三郎　せっちゃんを大切にしろよ

紀男　……

三郎　な？

紀男　あっちはよく爆発がおきて、人がたくさん死んでた。最近だと１９８１年、最新の設備を誇った北炭の炭鉱だったが、メタンガスによる大規模な火災がおきて９３人が死んだ。鎮火するには穴に水を入れて水没させるしかない。そのためには家族の了承が必要だった。当時の北炭の社長は、こう言ってまわったんだと。「ご家族のお命ちょうだいしたいということです」。穴に残された人の生死なんぞ関係なく水を注いで鎮火した。その穴の入り口にはデカい慰霊碑が立っている。それに比べたら、三菱がやってる炭鉱はオレが働いてからはサブちゃんが腕なくした事故以来、起きてない。だから事故なんて関係ないって思ってた。その日、オレは二番方で昼３時から夜１１時まで掘るはずだった

紀男、ズカズカとモニュメントの裏にまわり、バックを引っ張りだし中身を確認。上手から出ていこうとする。セツ、上手から入ってくる。

セツ　あれ、もう帰ってきたの？

紀男　……

セツ　さっき出かけたばっかりでしょ、どうしたの？

紀男　事故がおきた

セツ　え？

紀男　かなりデカい。穴に入ろうとしたら爆風が起こった。救護隊で行かなきゃならない

セツ　……

紀男、いったん去るが、すぐ戻ってきて。

紀男　いつ戻れるか分からないけど、あの、アレだ……心配するな

セツ　……行かないとダメなの？

紀男　……仕事だからな

紀男、去る。心配でどうしていいか分からないセツ。しばらくすると
セツの友だちが風呂敷包みを持って急いで来る。

友だち　せっちゃん

セツ　……

友だち　外、救急車とかパトカーすごいよ。ヘリコプターとか飛んでる。テ
レビでもやってるし

セツ　そう

友だち　紀男さんは？　大丈夫？

セツ　……紀男さん、救護服持って炭鉱戻った

友だち　救護、え？　助けに行ったっていうこと？

セツ　うん

友だち　ええ？　これから穴の中に入るの？

セツ　……うん

友だち　……それ、どうしても行かなきゃいけないの？

セツ　え？

友だち　危ないじゃない

セツ　助けに行くのも仕事だから

友だち　消防とか救急は？

セツ　そういうのは入れないの。なんかあったら従業員が助けにいくって、
なんかそういう法律があるの

友だち　そうなの

セツ　うん

友だち　……ニュース

友だち、（モニュメントに向かって）テレビをつける。しばらく見てる
が。

友だち　……あ

セツ　え？

友だち　この人知ってる

セツ　……名前出てるの？

友だち　うん

セツ　……この人

友だち　知ってる人？

セツ　向かいの住宅のダンナさん……一昨日、ウチで飲んだ

友だち　……そう

セツ　あ、この人……あ……あ

間。友だち、持ってきた風呂敷包みから、イモを取り出し。

友だち　はい

セツ　え？

友だち　食べよう

セツ　いや、今はちょっと

友だち　待つしかないね

セツ　え？

友だち　帰ってきたとき、ちゃんと迎えないと

セツ　……

友だち　ね？

セツ　……うん

友だち　弟が持ってきてくれたんだ、これ

セツ　そうなの？

友だち　うん

セツ　ありがとう

間。二人、イモを食べる。

友だち　そろそろ山菜、取りに行かないとね

セツ　うん

友だち　今年もいっぱいとって瓶詰め作んなきゃね

セツ　……

友だち　……

セツ　あくびしてた

友だち　え？

セツ　あの人が石炭掘りに行ってるとき私……毎日、あくびしてた……こんな事になるかもしれないとか、全然思わなかった

友だち　……

セツ　新しい住宅に住めて良かった、とか思いながらテレビ見て、あくびしてた

間。

友だち　そうか

セツ　うん

友だち　あたしは結納の時、あくびが出たよ

セツ　え？

友だち　声も出たし

セツ　え、本当に？

友だち　うん、向こうの親戚呆れてた

セツ　（笑）

友だち　（笑）

間。

友だち……いいでしょ、あくび出ても

セツ　え？

友だち　なにがいけないの？　それでいいんだよ……ね？

セツ　……うん

次の日の朝6時。

友だち　ゴメン、私ウチで朝ごはん支度するから一回戻るね

セツ　うん、ありがとう

紀男、入ってきてセツを見る。

友だち　せっちゃん！

セツ　……お帰りなさい

紀男。感極まるが、何も言わずモニュメントの裏に隠れる。

セツ　え？

紀男　……

友だち　じゃあ行くね

セツ　うん

友だち、上手に去る。

セツ　心配してくれて一晩中いてくれたんだよ

紀男　……

セツ　全部終わったの？

紀男　……ああ

セツ　……ケガしてない？

紀男　……

セツ　ご飯食べるでしょ？

紀男　ひどかった

セツ　……え？

紀男　とにかくひどかった

セツ　おかえりなさい……いま、ご飯の仕度するから

セツ、下手に去る。

紀男　立ったまま人が埋まってた。倒れる暇もないくらい一瞬で、高熱の土砂に埋まったんだ。真っ黒に焦げちまって。それを手で、穴がせまくてスコップ使えないから、手で土砂よけてやった。「今だしてやるからな、もう少しがんばれ」って声かけてよ

紀男、モニュメントの裏から出てくる。その顔には救護用のガスマスクをつけている。

紀男　顔が3倍くらいに腫れてて。その顔を、先に口から鼻から手拭いでまいてやるんだ。そうしないと中のものが、バーって出てくるんだよ。で、土砂から引っ張り出してやると、最初は細いんだけど、どんどん太くなって腫れてくる……そんなのを何十人って陸に上げた。作業が終わって陸に上がる時、目の前にスコって鞄がおいてあったんだ。「なんだこれ?」って開けてみると、誰かの頭が入ってんだよ。あとで人から聞いたら、胴体も探し出して一緒に上げてやろうって思ったんだと。他にも、ありえない格好になってるヤツらたくさんいたよ。あ、人間ってこんな感じで死ぬんだなって

紀男、ガスマスクをはずし、デッキブラシで床を磨く仕草をしながら。

紀男　昭和60年のこの事故で62名がなくなった。炭鉱の前にはデカい慰霊碑が建てられた。これで日本の石炭産業は終わっていく。オレは、この事故で炭鉱がもう嫌になって、閉山する前にやめた。それで大夕張の浄水場の管理人になって南部から通うようになった。この浄水場は高台にあって、眺めはとてもいい

下手から、スーツにメガネの男（沢田役）がビジネス鞄を提げて出てくる。

男　あの、すみません

紀男　……

男　こちらにお住まいの方ですか？

紀男　はい？

男　（舞台奥を見て）あ、あ～眺めがとても良いですね～あ～すごいすごい。やっぱりこれだけ登るとな～

紀男　……

男　あれ？　あの山がもしかしてアレですか？　大雪山っていう山ですか？

紀男　え？

男　え？　たいせつ……

紀男　夕張岳です

男　夕張岳。あ、失礼しました（笑）ちょっとあの、こちらに引っ越してきたばかり、でどうにも地理に疎くて、はい（笑）あ、あ、そうですか～アレが。へ～ステキな山ですね～いや、こんな所に住んでるのうらやましいです

紀男　え？

男　え？

紀男　あの、どちらさま？

男　あ、失礼いたしました私、あの～こういうものです（名刺を渡す）

紀男　等々力って言うんですか

男　はい、私、等々力と申します

紀男　日の出建設、

男　はい札幌から来ました

紀男　……そっちの道から来たの？

男　はい？

紀男　そっちから来たら大変じゃなかった？

男　いえいえ、そんなことないです。

紀男　あ、そう

男　はい

紀男　いや、こっちのほうが道も広いし、坂もゆるいよ

男　……あ、そうなんですか（笑）あ、そっちにも道あるんですか。あ～（笑）どうりで坂も急だし道細いし草ボーボーだし、ちょっと大変でしたね（笑）

紀男　……

男　やっぱりアレですね。こちらの地区は今、引っ越したお家は全部とり壊してるんですね

紀男　……ダムに沈む前に更地にするからな

男　ここ昔はたくさん人が住んでたんですね

紀男　そうだね、今はたぶん３００人もいないね

男　そうですか

紀男　あの、なんの用ですか？

男　あ、はい。いや～もうあれですか？　お決めになりましたか？　移転先

紀男　は？

男　いえ、あの～アレです。こちらの地区、ダムの建設が決まってますよね？

紀男　……

男　もし、この先どこに住もうかと、ご検討の場合はですね、是非とも当社が相談に乗るというか、お力になれればと思いまして、こうやって、こちらの地区をまわっております。

紀男　あ、そう

男　ええ、ええ、そうなんです。まあ今すぐ考えるとか言っても大変ですよね。なので、こちらのパンフレットだけでも目を通していただけたらなと思いまして、お配りしています。

男、パンフレットを差し出す。紀男、受け取る。

紀男　家買ってる人、いるのか？

男　はい？

紀男　あそこの人で

男　……まあ、多少は（笑）あ、ティッシュもついてますよ（笑）

紀男　あ、どうも

男　いえいえ（笑）……それであの、アレですか？

紀男　はい？

男　もう移転先はお決まりですか？

紀男　ここ違うよ

男　はい？

紀男　ここは家じゃなくて浄水場なんだよ

男　……浄水場？

紀男　うん

男　え、じゃあここには住んでないんですか？

紀男　（うなずく）

男　あ、そうですか……浄水場。あ～はいはい、それでなんかモーターみたいな音がず～っとしてるんですね……でもこの辺りには住んでるんですよね？

紀男　前は住んでたよ

男　前は……あの、失礼ですが今はどちらにお住まいですか？

紀男　……南部に住んでる

男　南部？

紀男　……知らないの？　ここに来る途中の、ダムに沈まない所

男　……あ、そうでしたか。じゃあ移転とかしないってことですか？

紀男　うん

男　移転費も出ない？

紀男　……移転費？

男　ああ、いえいえ（笑）

紀男　……オレはダムの話が出るちょっと前に引っ越したから、移転費もらえないんだ

男　ああ、そうですか

紀男　だからこの歳になっても働いてる

男　なるほど（笑）

紀男　でも、この仕事もなくなる

男　……じゃあその、もしですね。その、南部？　からですね、引っ越す場合がありましたら、私いつでも相談にのりますので気軽にご連絡いただけたらなと思います。また近くに来ましたら、寄らせていただきますね。

紀男　来年なくなるよ

男　ああ（笑）、ではもうまた近いうちに。はい、では失礼します。

男、下手から出て行こうとするが。

紀男　ちょっとちょっと

男　はい？

紀男　こっちのほうが帰り楽だよ？

男　あ、あの（笑）来た道帰らないと迷いそうなので。私、方向音痴でして初めてのところはどうも（笑）でも、ご親切にありがとうございます

紀男　あ、そう

男　……あの～

紀男　はい？

男　つかぬことをお聞きしますが、富良野は近いんですか？

紀男　は？

男　いや、ほら私、「北の国から」とかのアレでちょっと、憧れてる部分もありまして。行ってみたくて富良野の、麓郷？

紀男　あの夕張岳越えたら富良野だよ

男　ああ、そうですか～今度行かせていただきますね

紀男　こっちには来たことないの？

男　ああ、私あの、最近東京からね、引っ越してきたというか

紀男　……

男　あの、ほらバブルがね、ポンって（笑）で、あれなんで。せっかくだからまあこっちにきてとか思って、そしたら営業の仕事を見つけて（笑）でも営業って大変ですね（笑）なに言ってんだろ（笑）いや～しかし北海道は自然が素晴らしいですね

紀男　あのさ

男　はい？

紀男　ここも良いところだよ

男　……もちろんもちろん

紀男　でも、なくなるんだよ

男　あ……はい。あの、じゃあ失礼します

男、下手から去る。茂治、上手から出てくる。

茂治　あ、いたいた

紀男　あれ、どうしたの

謙三も上手から出てくる。

紀男　おお、そろってどうした？

茂治　いや、謙ちゃんがお前に挨拶してから行くっていうからついてきた

紀男　あ、そうか。もう札幌行くのか

謙三　うん

紀男　じゃああれか？　もう家は壊したのか？

謙三　うん

紀男　そうか、じゃあ聞いてたかもな

謙三　え？

紀男　ここいると毎日よ、重機で家壊す音が聞こえるんだよ

謙三　……あ～そうか、ここにいりゃ聞こえるよな

紀男　うん

謙三、舞台奥にいき、街を眺める。

茂治　その音が聞こえなくなったら、ここに誰もいなくなったってことか

紀男　そうだな

茂治　じゃあ一人でも残ってたらお前、ここで働けるな

紀男　そうだよ、人住んでるうちは水道必要だからな

茂治　オレが最後までいてやるよ

紀男　いいよ、早く引っ越した方がいい

茂治　なんでだよ、出て行ってほしいのか？

紀男　そうじゃないよ

謙三　この前さ、最後だからって孫呼んでさ一晩泊まらせたんだ。どうせ壊すからさ、孫に落書きさせたよ壁一面に

茂治　あ、そう

謙三　そしたら孫が、おじいちゃん大好きって書いてさ～

茂治　そうか～

紀男　よかったな～

謙三　孫の気持ちがあそこに刻まれたと思ったよ、うん

紀男　なにローマンチックなこと言ってんだい

謙三　（笑）

茂治　紀男、紀男

紀男　ん？

茂治　こいつ、この前あそこ行ったらしいぞ。あの北炭のほうの遊園地

紀男　え？　行ったのか謙ちゃん

謙三　ああ、孫と一緒にな

紀男　（笑）オメェ、よく行くなあんな所

謙三　え、なんで？　紀男さん行かないの？

紀男　オレは大夕張の人間だぞ、誰が行くか

謙三　いやほら、孫とか連れていってほしいだろ

紀男　それはアレだ、息子夫婦が連れてってるだろうけど、オレは行かねえよ

謙三　あ、そうかい。いや～にぎやかだったよ。

紀男　そうなのか

謙三　北炭のほうは観光だって景気がいいよな

紀男　浮かれて盛り上がってるの、北炭の周りだけだろ。オレたちには関係ねえよ。

謙三　まあ、そうだな

茂治　謙ちゃん

謙三　ん？

茂治　ちょっとノド渇いたからよ、浄水場の水汲んできてくれよ

謙三　え？　あ、ああ

紀男　アニキ、オレが

茂治　あ、いい。いい。謙ちゃんだって最後に、ここのウメえ水飲みてえだろ？

紀男　え？

謙三　あ、まあそうだな

茂治　早く汲んできてくれよ

謙三　お、おう

謙三、上手に去る。茂治、謙三が去った方向を見ている。そして懐から分厚い茶封筒を出し、紀男の手に渡す。

紀男　え？

茂治　これ、前言ってたヤツ

紀男　今かい？

茂治　おお。郵便局の保険、ひとつ解約してやったよ。はやくしまえよ

紀男、ポッケに突っ込むが、手でその感触を確かめて。

紀男　これちょっと多くないか？

茂治　そんなことねえよ１２０万あるから。せっちゃんの治療費にゃ全然足りねえと思うけどよ、少しは足しにしてくれ、な？　もうアレだ、嫁も死んで俺一人だからよ、金つかわねえんだよ。もう気楽だよ

紀男　……アニキ

茂治　あ？

紀男　千寿子さんの墓、どうしたんだ？

茂治　ん？

紀男　移転でお寺もどっかいっただろ？

茂治　自分で引き取ったよ。当たり前だろ、そのうちまたどっかに墓 立てるよ

紀男　……そしたら、その時に金が

茂治　オメェと違ってよ、移転費もらってっから大丈夫だよ

紀男　でも

茂治　うるせえな～それよりよ

茂治、客席側を指さす。

茂治　あの山ってなんだっけ？　あの山の名前

紀男　え？

茂治　いや、昔よく千寿子とスキーやったなって思ってよ

紀男　ああ、え～と、最近もの忘れがひどくてよ思い出せねえんだよ、あそこ登ると夕張岳が下に見えてたな

茂治　あ、そうだ眺め最高だった

紀男　あの～あれ、数字だよ。標高がそのまま名前になってんだよな……
はっぴゃく……八百五十
茂治　あ、そうだそうだ（笑）……へんな名前の山だよな～

紀男、大夕張の歌の四番を唄う。途中から茂治がかぶせて唄う。歌が終わって、何度か茂治に声をかける。三郎と謙三、話ながら上手から出てくる。

謙三　サブちゃん、車が通ったからって走りすぎだよ
三郎　はいはいはい
謙三　間に合うわけないのにあんなに走って。あんまり無理しないでくれよサブちゃんまで倒れたら大変だろ
三郎　はいはいはい、茂治さん起きた？
紀男　ん？
三郎　だめ？
紀男　（うなずきながら咳き込む）
三郎　あ、そう
謙三　救急車、いつ来るんだ
紀男　オレの時でもだいぶかかったぞ
三郎　紀男さん、珠恵ちゃんに電話したらいいんでないかい？
紀男　え？
謙三　あ、そうだよ。珠恵ちゃんすぐ来るよ。そうだそうだ
紀男　珠恵、今運転してんじゃねえかな

紀男、電話をかける。

紀男　もしもし、え？　あ、オレだけど、すぐ戻ってきてほしいんだけど。
え？　あ、はいはいあとでかけます
三郎　え！？
謙三　なんだって？
紀男　ちょっと今いそがしいって
謙三　ああ、そう

三郎　ええ！？

紀男　運転中

謙三　珠恵ちゃんどこ行ったの？

紀男　病院に行ってる

謙三　え、どっか悪いのかい？

紀男　あれ妊娠してんだ

三郎　ええ？

謙三　あ、そうかいそうかい～

紀男　あの～アレ、五ヶ月

謙三　紀男さん、ひ孫もできるんかい？

三郎　あら、じゃあそれまで死ねないね～

謙三　貴重な子どもだね～

三郎　うん、いやアレだな。めでたいな。

謙三　待望の子どもだな

三郎　これからの夕張はアレだぞ、子どもにやさしいぞ

謙三　そうなのか？

三郎　いま、がんばって保育料とかいろいろタダにしてんだって

謙三　そうか、まあオレらもいるしな

三郎　ああ、そうだ。オレは子育て得意だぞ～

紀男　なに言ってんだ。もうすぐ電車もなくなるんだぞ、この街には

三郎　……

謙三　……あ、そうなんかい

紀男　そうだ、だから珠恵たち引っ越そうかって話してんだ

謙三　え？

三郎　引っ越す？　いなくなるのかい？　なんで

紀男　子どものこと考えたらそうだろ

謙三　……そうかい

紀男　まあ今は夕張生まれっていうの隠す子もいるみたいだな

謙三　……え？　なんで

三郎　そりゃお前、だってほら……アレだから

謙三　なんで自分が生まれた土地を言えないんだよ。良いとこだぞここは

三郎　……

紀男　おい、薬

三郎　え？

紀男　茂治さん薬持ってないか？　なんか心臓悪いって言ってたんだろ？

謙三　あ、そうだ

三郎　そうなのか？

謙三　そうだったそうだった

三郎　どれどれ

三郎、ポッケを探ると茶封筒が出てくる。

三郎　封筒が出てきたよ

紀男　あ

三郎、茶封筒を開ける。

三郎　お金が入ってるよ

謙三　いくら？

三郎　一万円

紀男　え？

謙三　一万、金持ってるな。なんでさっき……あ、そうだ薬はないのか？

三郎　え～と

紀男　三万じゃないのか？

三郎　え？

紀男　三万入ってるはずだぞ？

三郎　……なんで？　え、これ紀男さんのかい？

謙三　紀男さん、お金貸したのか？

紀男　え？……なに、なんで？　貸してないよ。貸すってなに？

謙三　……

三郎　だっていま三万入ってるって

紀男　いや、なんか三万入ってるようなそんな気がしたんだよ

三郎　……

謙三　……

紀男　貸した貸したけどな、それはまあ茂治のアニキから言われたら貸すだろそれは

三郎　なんで貸すんだよ、パチンコに使うんだぞ

紀男　知ってるよ、それでも貸すだろ、お前らは貸してないのか？

間。

三郎　貸してない

謙三　さっき言われた。貸してくれって。でも貸してない

紀男　（咳き込む）……そうか、お前らは貸さないのか

謙三　……サブちゃん、薬入ってないかい？

三郎　ああ

三郎、今度はポケットを調べる。すると銀色の円形の缶と白い封筒が出てきた。

三郎　これは……龍角散だね

謙三　あれ？　心臓の薬はないのかい？

三郎　あ

謙三　え？

三郎　……遺書だって

紀男　え？

謙三　……茂治さん遺書、持ち歩いてるんかい

間。

三郎　立派だな〜

謙三　うん、いつでも良いように準備できてるんだな

三郎　そうだな〜オレも見習わないと

三郎、なんの気なく遺書をあけ、読もうとする。

紀男　おい、なにやってんだ

三郎　え

紀男　それ、読むのか？

三郎　うん。だって、このまま逝っちまったら、オレたちがなんかしてやんねえとだろ？

紀男　家族がいるだろ……あ、いないか

三郎　いないよ

紀男　いないな

謙三　え、いないっけ？

三郎　いない。オレたち一山一家だろ

紀男　そうだ（咳き込む）

謙三　そうだそうだ

三郎、開けて読む。

紀男　（咳き込む）

謙三　紀男さん大丈夫かい？　これ飲んだら

謙三、龍角散を渡す。

紀男　あ、ありがとう

三郎　遺書。これを読まれる方、ありがとうございます。ずいぶん苦労してきました。わたくし、精一杯やってきました。★この大夕張の地が好きで好きでなりません。この手紙の他に、龍角散の缶がありますか？

茂治　★この大夕張の地が好きで好きでなりません。この手紙の他に龍角散の缶がありますか？　それは、妻の千寿子です。千寿子の遺骨が入ってます。あいつは藤田まことが大好きでした。パーラーハビンに行けば、藤田まことに会わせることができます。ＣＲ必殺仕事人ビクトリーは一円パチンコなので長く遊べました、千寿子はとても喜んでると思います。きっと喜んでると思います。ご協力いただいた方々、感謝しております。家に息子たちの龍角散もあります……

猫のもあります、猫の名前もチズコです。これを読んでくれた方、あとはどうぞお頼み申し上げます

間。謙三、紀男が持ってる龍角散を見て。

謙三　それ、千寿子さんかい？

紀男　……飲むとこだった

三郎　墓は作ってないのか、茂治さんは

紀男　ダムに沈む時、寺が他へ行っただろ。その時引き上げたんだ

三郎　そうなのか

謙三　家族、みんないるのか。うちに

間。

三郎　こんなことになるんだったら、もう少し会ってやればよかった

紀男　……今さらなに言ってんだ

三郎　……

紀男　お前が、そういうヤツって知らなかったぞ。腕だけで済んだのは誰のおかげだ？　それを忘れてアニキをバカにして

三郎　バカになんかしてないよ

紀男　してるだろ、ぜんぜん会ってやらなかったくせに陰口ばかり言って

三郎　だって……金貸せって金貸せって言われたら、そりゃ嫌になるだろ

紀男　オレは貸したぞ

間。

三郎　紀男さんは貸したから偉いのか？

紀男　あ？

三郎　恩があるからって金貸したらそれで良いのか？　もっと他にやりかたあったんじゃないか？

紀男　……

三郎　金貸したら、おとなしくなるだろって、それ繰り返してたんだろ？

……あんただってやってること同じだろ

間。

謙三　もうこのまま沈めたらいいんじゃないか？

間。

三郎　沈めるってどこに？

謙三　シューパロ湖に……大夕張が好きで好きでって書いてただろ？　そのほうが幸せじゃないか？

紀男　……謙ちゃん、お前何言ってんだ？

三郎　そうだよ。俺たちが死体遺棄でつかまっちゃう

紀男　アニキは死んでねえよ

三郎　……

謙三　生きててもつらいだけだよ。オレもういいよ、捕まっても……刑務所行ったらいろんなこと心配しなくてすむし、もう悲しむ人もいないし

紀男　そんなのオメェが決めることじゃねえだろ

三郎　謙ちゃん、今息子と暮らしてんだろ？

謙三　うん

三郎　どうすんだよ

謙三　オレの年金で生きてるから、なんとかなるだろ

三郎　つかまったら年金てどうなるんだ？

謙三　あ……分かんない

間。

三郎　遺書にもどうしてほしいとかないしな

紀男　おい、あれ

謙三　え？　あ

菊子、上手から入ってくる。

菊子　あの……どうも

三郎　……★どうも

紀男　……★どうも

謙三　……★どうも

間。

菊子　あの、こちらにまだいらっしゃったんですね

謙三　あの……あの～……なんとかさんの奥さん

菊子　沢田です

謙三　沢田、ああ○○○（適当な名前を言う）だっけ？

三郎　違う違うあの～○○○だよ

紀男　○○○

菊子　忠です。

三人　あ、そうだそうだ

謙三　で、忠は？

菊子　今向こうでカヌーに乗ってまして

三郎　カヌー？　いま乗ってんのかい？

菊子　はい

三郎　へ～

紀男　珠恵がな～、あれ夜も行くんだよ

謙三　え、夜も乗るんかい？

紀男　そうそう、月が水にうつってキレイだと、

謙三　良いね～

紀男　良くないよ、夜はやめろって言ってるんだ。危なくてしょうがない

謙三　へ～じゃあアレだな……オレたちの思い出は沈んだけど、月とカヌーは浮かんでんだな

三郎　……謙ちゃん

謙三　ん？

三郎　ローマンチックだな、その顔で～

謙三　その顔は余計だろ、その顔は

紀男　昔からそうだった昔から

三郎　ダンナさんだけ乗ってるの

菊子　はい。わたしはちょっと苦手なもので

三郎　ダンナさん、そういうの好きなの？

菊子　いや、どうなんですかね。好きだって知らなかったんですけど。なんか自分に縁のある場所に来れて嬉しいみたいで

三郎　ああ、そうかいそうかい

菊子　普段、仕事しかしてないので、こんなの久しぶりなんです。昔はよくやってたんですよツーリング

謙三　いまはやってないの？

菊子　そうですね。仕事が忙しくて

三郎　仕事、大変なのか？

菊子　はい、人がいないみたいで、家にいる時間がなくて

紀男　なにやってるの？

菊子　飲食店で店長です

紀男　あら、すごいね

菊子　休みがほとんどなくて

三郎　〇〇〇は四十過ぎだっけ

菊子　はい

三郎　そのあたりも大変なんだろ？

菊子　……そうですね

間。菊子、茂治の所へ行き。

菊子　あの……あの、すいません……（三人に）寝てらっしゃるんですか？

間。

三郎　いや、ちょっとね

謙三　茂治さんになんか用？

菊子　あの、ちょっと、この方に色々言い過ぎたと思って。さっき

謙三　……何を言い過ぎたの

菊子　え？

三郎　ほら、さっきなんか怒って帰っただろ

謙三　ああ、そうか

紀男　わざわざ来たのか

菊子　はい

紀男　……

三郎　でもな、茂治さん動かないんだよ

菊子　はい？

三郎　息してないんだ

菊子　ええ？

間。

菊子　救急車は？

三郎　★電話したよ

謙三　★この人がした

紀男　★呼んだ

菊子　え？　呼んだんですか？

三郎　☆はいはい、そうだよ

謙三　☆この人が呼んだってば

紀男　☆電話でアレだ、アレ

菊子　いつですか？

三郎　★さっき

謙三　★さっき

紀男　★さっき

菊子　……そうですか

間。

紀男　待つしかないんだ

謙三　うん

間。

三郎　あんた、ダンナさんのとこ戻ったらどう？

菊子　え？

三郎　カヌーから戻ってアンタがいなかったら、心配するよ

菊子　……ああ

謙三　そうだな

三郎　これ、アンタには関係のないことだろ

菊子　……

菊子、上手へ去ろうとして立ち止まり。

菊子　あの

三人　……

菊子　そっちに明石橋ってありますよね？

三郎　え？　うん、あるよ

菊子　この辺の橋の名前って、アレですか？　もしかして

紀男　……アレだよ、沈んだ町の地名だよ

菊子　あ、やっぱり

紀男　え？

菊子　いえ、ウチの人から聞いてきてって言われて

謙三　明石っつったら、駅のそばに高島ラーメンあったよな。交番の向かいに

紀男　ああ

謙三　あと、アレアレ、津留商店

三郎　よく覚えてるね～

謙三　ええ？　次なんだっけ

三郎　その次は、あの～千年（ちとせ）だ

紀男　そうだそうだ千年だ

謙三　ああ、パチンコ屋、あの～ニュー三洋パチンコ

紀男　そんなのあったか？

謙三　あったよ、茂治さん言ってた。っていうか千年は茂治さんの家があったよな

三郎　そうだそうだ、なにかって言ったら集まってた

紀男　喜久寿司あったな

謙三　★喜久寿司

三郎　★喜久寿司あったな～

謙三　あったあった

紀男　え～とその次って、向こうからってことだろ？　常磐（ときわ）か？

三郎　常磐って、あの～中学校あったな

謙三　あったか

三郎　あったよ、紀男さんちもあった

紀男　そうだよ

謙三　ああ、そうかそうか

紀男　え～次なんだっけ

三郎　いや～もう無理だな

謙三　わかんないよ

菊子　あ、ちょっと待ってくださいね

三人　え？

菊子、スマホをとりだし画像を調べる。

菊子　さっき順番に撮ったんですよ……錦橋

三郎　ああ、錦

謙三　錦町、みやちゃん

紀男　みやちゃん

三郎　みやちゃん

菊子　泉橋

謙三　泉っつったら、サブちゃんの写真屋だよな

三郎　うん

紀男　世話になったな

三郎　へへ

菊子　富士見橋

謙三　富士見ってなんかあったっけ？
三郎　う～ん
紀男　なんだっけな～
菊子　え～と、弥生橋
三郎　労働組合
紀男　うん
謙三　うん
菊子　代々木橋
謙三　オレの家があったぞ
三郎　そうだっけ？
紀男　あったか？
謙三　あったよ
菊子　初音橋
紀男　初音～
謙三　初音ってなんかあったっけな～
三郎　う～ん
菊子　北栄橋
三人　う～ん（笑）
菊子　岳富
三人　……
菊子　鹿島
三人　……
菊子　栄

三人、それぞれシューパロ湖の方向を向き、しばし見ている。が、菊子が上手の方を向き、

菊子　あの、誰か来ましたよ
三郎　おい、アレって
謙三　え？……あ、須藤じゃねえか？
紀男　え？　あ、須藤だ今さら来やがった
謙三　そうだよ。元はといえば、アイツがオレたちをここに集めたんじゃ

ねえか

紀男　そうだよな

三郎　そうだ、須藤に茂治さん乗せてってもらおう！

謙三　ああ、そうだ！

菊子　あれ、でも救急車呼んだんですよね

三郎　……ああ、そうか、忘れてた

謙三　そうだった

間。

紀男　待つしかないか

三郎　……そうだな

謙三　うん、待つしかない

間。

紀男　まあ、あれだ、話でもするか

謙三　……話すって何を？

紀男　……う～ん

間。

謙三　あの、何か話したいことありますか？

菊子　え、いや別に

紀男　まあ、なんでもいい

全員、どことなく茂治を見ている。

紀男　なんでもいいから

了